

「愛、キリスト者の条件」

エペソ人への手紙 1 : 15 - 16

February.13.2022

エペソ人への手紙 1 : 15 - 16 (パウロ)

Preface

先週の続きになります。

キリスト者とは何者なのか？ 最低限、どんな条件、何が備わっていることをもってキリスト者と言えるのか？ と問うならば、それこそ、信仰と愛だということをお話しいたしました。

特に先週は、今お読みいたしましたエペソ 1 : 15 から、「信仰とは、私の熱心や情熱、献身である以前に、または、いつの間にか私自身のことを信じるのではなく、イエス・キリストに対する信仰、イエス様を信じるのが信仰だ」ということを見て参りました。

私自身、先週のメッセージを再度振り返り、心の中で反芻していますと、なんとまあ「イエス様を信じている」と言いながら、「結局自分のことを信じていて、今の自分が現状打破や目標達成するために力が備わっているのかいないのか、備わっていれば信じられるし、備わっていなければ信じられないし不安で仕方ない、そして、その不安を何とかして埋めるための訴え程度にしかイエス様を信じられていないかもしれない、信仰をその程度にしか思っていないのかもしれない」と思わされました。

今個人的に民数記・申命記を呼んでいるのですが、神様が「乳と蜜の流れる地をあなたがたに与えるから、カナンの地に上って行きなさい」と仰せられたのに、「いやいや、あんなに体も大きくて力も強い人たちが住んでいる地に上って行くことなんか出来ない！」と大泣きしながら、自分たちを導いてきたリーダーであるモーセとアロンまで石で打ち殺そうとするイスラエル民族の姿が、私自身の姿のように思えてきて仕方ありませんでした。

結局今、私自身、何を最も信じているのかと言いますと、私自身の持つ不安、私自身が持つ恐れ、私自身が持つ能力を信じていて、主イエス様ではなく、不安や恐れや自分の能力のなさに確信、信仰を持とうとする傾向があることに気付かされました。

そして、その不安や恐れや能力のなさをもって、「不安がなくならないんです、恐れが付きまとうんです、能力が足りないんです」と、あたかもイエス様の首に喉輪をするようにしながら、「何とかしてください」と訴えることばかりをもって、「イエス様のことを信じていると言っているんじゃないか」と、「私の望む条

件や環境を満たしていただく程度にしかイエス様を信じていないのではないのか」と考えさせられました。

もちろん、ヨブ記や詩篇にもありますように、訴えもイエス様を信じているがゆえに出来る信仰行為だと思いますが、主イエスを信じるというのは、「イエス様は今も私を喜んでいてくださり、私に最善を成していてくださり、乳と蜜の流れる地と一緒にいてくださるお方なんだ」という「イエス様との関係を信じることだ」と改めて教えられた気がいたしました。

またこんな事を思い巡らしていますと、7年前の自分自身の姿が思い浮かびました。

何の確証も蓄えも力もないまま、家族6人でロスアンジェルスに着いて、恐れと不安と憤りで頭がおかしくなりそうな気持ちになっていた7年前の自分に、「大丈夫だよ！ 大丈夫だから！ イエス様が本当に素晴らしく、豊かに導いてくださるから大丈夫だよ！ 楽しんで！ イエス様を信じて！ イエス様から目を離さないで！ あなた自身じゃなくて、イエス様を信じて！」と、声をかけることが出来るならば、声をかけてあげたいと思いました。

それと同時に、「5年後、10年後の自分が、また今の自分にこんな声をかけてあげたくならないように、今、イエス様を信じたい。自分自身に対する信仰ではなく、イエス様に対する信仰を今持ちたい」と思わされた1週間でした。

そして今日は、主イエスに対する信仰に続く、すべての聖徒に対する愛について考えていきたいと思っております。

愛について語ることは、正直、語りにくくもあり、聞けばプライドが傷つき、出来ていないことが辛くもあり、耳を覆いたくなる話かもしれませんが、それでも聖書が教え、神様が私たちに語ってくださっているのです、お話ししたいと思います。

Part One

15節を見ますと、

エペソ人への手紙1：15（パウロ）

と言いながら、使徒パウロは、主イエスに対する信仰が神と自分との関係のみに留まって完結するのではなく、すべての聖徒に対する愛にまで及んでこそその信仰だということを、私たちに教えてくれます。

「主イエスに対する信仰」、「すべての聖徒に対する愛」と、信仰にも愛にも「対する」という言葉を用います。

つまり、信仰も愛も対象があつて初めて、成立するものだということです。

信仰については、先ほども言いましたように、主イエスがその対象です。
そして、愛にも対象があります。

ここ15節では、すべての聖徒に対する愛と言っていますが、愛はいつでも、自分を愛することにあるのではなく、他者を愛することにあると言います。

私たちよく知っている第一コリント13章にありますように、「愛は、自分の利益を求めず」です。

ということは、「愛とは、相手の利益を求めること」になります。

「自分の利益を求めず」という言葉は、とんでもない言葉だと思います。

自分の利益の事ばかり考えながら生きている社会、私たちにあつて、正に逆行する言葉です。

「でも、本当は、自分の利益を求めない、他者の利益を求めるような生き方をしたい」という「良心」も私たちの内にはあります。

神様は、聖書の御言葉を通して、その小さな私たちに本来与えられている本能である大切な良心に、愛の本質を、愛の実践の真実さを語り掛けて下さいます。

ですが、自分の利益を求めず相手の利益を求めるような愛は、イエス・キリストが主人となり、私たち一人一人が平等に下つ端となった時にのみ表れます。

もしイエス様なしで私という人が主人になりますと、私たちは、皆を私の召使い・下人にしてしまいます。

こうなりますと、愛が、同情になり、優越感に様変わりしてしまいます。

Part Two

主題聖句のメッセージの時にもお話ししましたが、イエス様は聖書66巻をたった二言にまとめなさいました。

マタイの福音書22：36－40（パワポ）

ここで興味深いのは、第一の戒めが主なる神様を愛することで、第二の戒めが隣人を愛することなのですが、第二の戒めを説明する際に「それと同じように」と仰ったことです。

つまり、神を愛することと隣人を愛することは、同等、同じだということです。

神様を愛さずして、隣人を愛することは出来ません。

神様が主権者としていてくださり、その前に跪く時のみ、他者が私の愛する隣人となり、同等に、同じ痛みを共有する愛すべき、愛されるべき人格となります。

ですが、イエス様なしに私という人が主人になりますと、私たちは皆王となつて、私以外のすべての人が、私の臣下になってしまいます。

私たち人間が、主イエス様を知らないならば例外なくこうなります。

私が王となつて、一人でも多くの人を私の臣下にして、私の持つ劣等感を覆い隠したい、そんなものを持っていないと見なしたい、自分の正しさを示したいという欲求も正しいと思えてきます。

そして、人格的のみならず、時には肉体的・精神的にも相手方を殺して、自分の満足を得ようとしします。

「主イエス様を知らないならば」と言いましたが、主イエスを知っていると自負する私たちクリスチャン、聖徒たち、信徒たち同士でも、巧妙に、自分の満足のために相手方を殺すという根っこが残っていて、

本人としては「信仰的行為をしている」と言うものの、それが「私は愛を施している者」、「私はキリスト者らしい聖い者」という自らの証明のための愛であつて、相手方を本当に尊重し、敬意を払いながら尽くすことが出来ません。

その様を見ることが出来ません。

私たちが正直に御言葉と向き合いますと、出来ない自らの姿をいつも示されます。

クリスチャンであるものの、私たちの心の内には、「あの人のあの様を見たくないから、気に食わないから行きたくない」というような思いが未だにあります。

私たちキリスト者にとって、この愛の問題は並大抵のことではありません。

愛するというのは、そう簡単に解決できるものではないですね。

全自動洗濯機に入れて、強力な洗剤を入れて、漂白剤を入れて洗ったら綺麗になりましたというようなものではないですね。

私たちの信仰が、本当に主イエス様を崇め、褒めたたえ、その御座の前に跪きながら主を信じているのかどうかは、私にまだ憎い人、気に入らない人、目障りな人、赦せない人、なんだか気に食わない人、見下げている人、嫌いな人がいるのかどうかをもって確認できます。

それが、イエス様の仰った「主なる神様を愛することと同じように隣人を愛しなさい」という言葉の意味ですね。

私たちクリスチャンが「たくさん祈った」とか、「聖書をたくさん読んだ」とか、「良いことをたくさんしています」とか、「教会で働いています」というようなもので、私たちの信仰を調べることは出来ません。

私が、憎い人、気に入らない人、目障りな人、赦せない人、なんだか気に食わない人、見下げている人、嫌いな人はもういないのか、まだいるのか、

自分の敵のために祈っているのか、いないのか、
さらにイエス様は、「隣人をあなた自身のように愛しなさい」と仰いましたから、私たち自身を嫌ってはいないだろうかということで、私たち自身の信仰を点検し、調べる事が出来ます。

自分自身に対しては挫折と絶望、人に対しては嫌悪
そんな自分に対する挫折と絶望、人に対する嫌悪から出てくる必要があります。

神様が私を変えて下さるということを信じ、私を赦してくださるということ
を信じ、私が憎んでいるあの人、私が嫌悪しているその人、全くもって可能性が
無いように見えるその人を、神様が変えて下さることを信じる事、これが信仰
です。

そしてまた、そこからのみ、私たちは、隣人を愛することが出来ます。
神様のご介入を、導きを信じるからこそ、隣人を愛することが出来ます。

Part Three

では、どんな隣人まででしょうか？

マタイの福音書 5：38－47（パワポ）

どんな隣人まで愛するのか？

私の右の頬を打つその人、私の下着まで取ろうとするその人、私に無理矢理遠くまで歩けというその人までです。

さらに私たちは、その自分の敵を赦すことを超えて、その敵のために祈らなければならず、愛を施し、愛さなければなりません。

愛とは赦す程度の事ではなく、敵が腹を空かせていたら食べさせ、のどが渴いたら飲ませてあげなければなりません。

どんな見地の時これが出来るのか？

「主を崇め、主を口先だけでなく、真に褒めたたえる」時だけです。

主イエス様が愛することを喜ばれるなら、私たちは、このことを無視し、顔を背けることは出来ません。

「何でそこまでやらなくちゃいけないのか？ 何で愛まで行かなくちゃならないのか？ 何で神様は、私たちをこんな到底出来そうもないことをようきゅうされるのか？」と、否定的ばかりに捉えないようにしましょう。

なぜならば、神の国は、満ち溢れているからです。

人々が互いに憎しみ合い嫌い合うのは、生存競争というこの社会の中で、二人が分けて食べるだけのものが無いように思えるからです。

一人分だけでも足りないように感じるため、相手方を損なわせてこそ、私が生きていくことができます。

ですが、神の国は愛を要求します。

神の国で愛を要求する理由のうちの一つは、分けても十分に余りあるほどに多くあるからです。

二人が分けて食べても食べきれないほどに、まだまだ余るほどに十分だからです。

実際にイエス様は、弟子たちが心配するほどに食べ物がなかった時も、「そのあなたがたが少ないと思う食べ物をわたしのところに持ってきて下さい」と仰せられた後、天を見上げて神様を崇め褒めたたえた後、5000人の人たちがお腹いっぱい食べて、12かごいっぱい溢れるほど余りました。

これが神の国です。

さらに付け足しますと、一人で何か物を持ち上げることの出来る量と二人で持ち上げられる量は違います。

例えば、一人金の塊20kgまで持っていけるとしたら、二人で持った時には、40kgまでしか持てないでしょうか？

違いますね。

二人で力を合わせて持つと、不思議なことに優に50kg以上は持てるようになります。

イエス様が私たちに、「あなたの敵までも愛しなさい」と言ったのは、私たちに無理難題を吹かけするためではなく、イエス様がお与えになろうとしているものが、敵までも動員しなければ到底運ぶことも、持ち上げることも出来ないほどの栄光であり、祝福であり、恵みであり、幸いであり、財産であり、食料であるからです。

イエス様が祝福の祈りを献げた後、お与えになったパンと魚をお腹いっぱい食べて満面の笑顔を浮かべながら喜び不思議がった人たちのほぼ全員が、後にイエス様の敵となって、イエス様を十字架に架けました。

それほどに、イエス様のお与えになる祝福は、とてもとても私の味方、私の仲間、私の家族だけで、受け止めきれるようなものではありません。

だから、イエス様は、あなたの敵を愛しなさいとおっしゃるのです。

イエス様がお与えくださった、お与えくださろうとしているものの前にあっては、敵も味方もなくなってしまいます。

敵も味方もなくなってしまうほどに、とてつもなく大きいものが、神の国です。

「私たちが蓄えた」とか、「私たちがここまで発展して、こんなものまで作ることが出来て、苦勞して所有することが出来たものを、誰に渡すものか」なんていう次元とは、全く違います。

次元という言葉を用いることさえもナンセンスに思えるほどに、栄光満ちたもう大きな祝福です。

神様がお与えくださろうとしているものを前にしては、私たち、敵味方何て言っている暇はありません。

敵味方一緒になっても、到底耐えることも、十分に果たすことも出来ないほどのものですね。

正に、天上のすべての靈的祝福ですね。

神様が建て上げようと、造り上げようとしておられるものは、あまりにも大きくて、栄光に満ちていて、私たち好き合っている者同士だけで作り上げ、掴んで握っているのには、あまりにも甚大です。

敵までも呼んで、一緒に持ち上げなければならないほどに大きく、そしてそこには、すべての人をその祝福の場へと導こうとしておられる神様の恵みが含まれています。

「敵のために祈り、敵を愛しなさい」というのは、神様の恵みがあまりにも大きいがために、先にイエス様を知り神の恵みを体験した者ならば、自然とそうしたいと、そうなるようになっていく事でもあります。

だから、使徒パウロは喜んだんですね。

「すべての聖徒に対する愛」というのは、愛するという善なる行いに留まる問題ではなく、それほどに、神様が与えたもう恵みをしっかりとエペソ教会の聖徒たちが分かっている、把握していて、実感できていた証だから、神様としっかり繋がっていることがそれをもって分かったから喜んだんですね。

Conclusion

独り占めすることが独占することではなく、隠すことであり、

二人で分け合うことが引きちぎられることなく、広げる広がる事であるような豊かさを、神様が私たちの人生に、私たちの存在に委ねてくださいました。それが信仰であり、愛です。

なので、信仰を持って一度、試してみませんか？

敵に食べさせてあげてみてください。

敵のために祈ってみてください。

それが、皆さんに、私たちに、どれだけ豊かなものを運んでくるのか経験することになるでしょう。

それが、イエス様を信じる信仰からのみ溢れ出てくる結果だということを見ることになるでしょう。

それが、私たちの信仰を点検する、もしかしたら最もよい方法だと思います。

このイエス様の、パウロの御言葉を前に、毎日私たちを点検し、

私たちが神の子として当然受けるべき富、私たちが神の子として当然受けるべき豊かさ、その瑞々しい命と栄光を一人で隠し持って腐らせるのではなく、分かち合い、広がっていく栄光を実際に享受する私たちでありたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：マタイの福音書 5：44